

1 学校教育目標	2 本年度の重点目標
西中一心 ～ 夢の根っ子を育てる ～	1 確かな「学び」を鍛える ～ 「活用」する力を育てるための授業改善、教科「日本語」の取組の推進 2 豊かな「心」を鍛える ～ なりたい自分像を考えさせる生徒指導の徹底【西中三訓、人権教育、部活指導】 3 健やかな「体」を鍛える ～ 活き活き部活動の推進、生活習慣の確立、命を守る登下校指導の徹底 4 教師集団の「組織力」を磨く ～ チーム「いしがき」(全職員の学校運営への参画、働き方改革の推進、熟練教師の技の伝承と若手、中堅教師の育成) 5 生徒を取り巻く「環境」を整える ～ 特別支援教育の充実、不登校対策の推進、危機管理体制の確立

重点目標を具体的に評価するための項目や指標を盛り込む

3 目標・評価						
① 確かな「学び」を鍛える						
領域	評価項目	評価の観点 (具体的評価項目)	具体的目標	具体的方策	担当分掌 (部)	担当者
教育活動	● 志を高める教育	自らの夢や目標の実現に向けて努力する気持ちを高める教育活動の推進ができているか。	・ 自らの夢や目標の実現に向けて努力する気持ちがあると答える児童(生徒)80%以上にする。 ・ 授業改善に向け、全教員が授業公開、授業研究会を1回以上行う。	・ 全ての教科等、学校行事等を通して、夢や目標について自ら考えさせる時間や場面を設ける。 ・ 授業改善に向けた授業公開週間を設けるなどして、相互参観と授業研究会を実施する。	校内研究	宮本
	● 学力向上	生徒の基礎学力は向上したか。 生徒の「活用力」は向上したか	・ 12月実施の県学習状況調査において、国語、数学、理科については各領域で4月調査の結果を上回る。他の2教科については、県平均を上回る。 ・ 12月実施の県学習状況調査において、国数理社英の活用力において4月の結果を上回る。	・ 校内研究の一つの柱として活用力の向上を位置づけ、5教科における活用力を明確にし、授業構成を見直し、年に2回の公開研究授業を行う中で、活用力向上に向けた共通実践を進める。 ・ 学習規律を確立するとともに、支持的風土を醸成し、学び合う集団づくりを展開する。	学力向上	楠
		・ 校内研究において、各教科における「活用力」の向上に向けた取組を、横断的・総合的に展開することで、生徒にとって「わかる授業」「ためになる授業」が実現できたか。	・ 授業評価アンケートで「授業がわかる」「ためになる。」と回答する生徒の割合を80%以上にする。	・ 活用力の向上に向けて全職員が参加する授業研究会や校内研修を年間を通して推進し、横断的・総合的な視点から授業構成を見直し、共通実践を進める。 ・ ユニバーサルデザインの視点を取り入れた授業について共通実践を進める。	校内研究	宮本
② 豊かな「心」を鍛える						
領域	評価項目	評価の観点 (具体的評価項目)	具体的目標	具体的方策	担当分掌 (部)	担当者
教育活動	● 心の教育	生徒行動目標である「禮(礼)を正し、時を守り、場を清める」が実行できているか。	・ 明るい挨拶ができる生徒を80%以上にする。 ・ 時間を守り行動できる生徒を80%以上にする。 ・ 時間いっぱい、一生懸命に掃除をしている生徒を80%以上ににする。	・ 全校、学年、学級、部活動などすべての教育活動を通じ、習慣化を図る。 ・ 学校行事や体験活動に向け、集中した取組を行う。 ・ 常に教師が清掃場所に立ち会い、無言清掃に率先して取り組み、生徒に達成感を味わわせるとともに掃除への意欲を高める。	生活 清掃	原 伊藤
		体験活動や奉仕活動を通して、心が育っているか。	・ 1年生では音楽鑑賞や絵付け体験、2年生では職場体験、3年生では赤ちゃんスイッチ事業を位置づけ、全校一斉読み聞かせや、外部人材の活用や交流を通して、自分自身が成長していると感じている生徒を80%以上にする。	・ 生徒が自己を見つめ、成長していくように、活動や体験後の取組を充実させる。 ・ 体験活動や奉仕活動の様子を生徒会役員を中心に積極的に外部へ発信する。	各学年 生徒会	学年主任 本村
教育活動	● いじめ問題への対応	いじめの早期発見・早期対応に向けた体制づくりができたか。	・ いじめ防止の観点に基づき、相手を思いやり受け入れる態度を有していると考えた生徒を100%にする。 ・ SCやSSWと保護者・担任との連携が十分できていると考える教員を100%にする。	・ 生活やいじめに関するアンケートを毎月2回実施し、生徒の実態把握に努める。 ・ 人権集会の取組や道徳教育の推進、QJを基にした集団づくりの推進を通して望ましい人間関係を育む。 ・ 教職員を対象に実践的な校内研修を1回以上、実施する。	人権・同和教育 生徒指導 教育相談	平田 原 黒田
③ 健やかな「体」を鍛える						
領域	評価項目	評価の観点 (具体的評価項目)	具体的目標	具体的方策	担当分掌 (部)	担当者
学校運営	○ 活き活き部活動の推進	自分の健康や体づくりについて意識を高めることができているか。	・ 部活動や社会体育、文化活動に積極的に取り組む生徒を80%以上にする。	・ 部活動の顧問を複数体制とし、常に臨場指導を行う。 ・ 部活動や社会体育、文化活動の意義を踏まえた指導と適正なあり方について、保護者会、学校だより等で周知する。	部活動	池浦 顧問
教育活動	● 健康・体づくり	望ましい食習慣と食の自己管理能力の育成ができたか。	・ 朝食をとって登校する生徒を90%以上にする。 ・ 基本的な生活習慣を身につかせ、健康意識の高い生徒を育成する。	・ 毎月1回、保健だよりやアンケートを通して朝食をとることの意義の理解と啓発を行う。 ・ 家庭科や学級活動の授業を通して、朝食の大切さを再認識させる。	食育指導	畑中
		家を出て再び帰り着くまでの生徒の安全確保はできているか。	・ 登下校時の交通ルールやマナー、学校生活のルールやマナーが守れている生徒を80%以上にする。	・ 各学年安全指導担当、生徒会担当、部活動顧問を中心として登下校指導を行う。学年、学期の初期には集中した登校指導を行う。 ・ 生徒指導や各学年計画に基づき、昼休みの巡回指導を行う。	安全指導 生徒指導	深井 原
④ 教師集団の「組織力」を磨く						
領域	評価項目	評価の観点 (具体的評価項目)	具体的目標	具体的方策	担当分掌 (部)	担当者
学校運営	● 業務改善・教職員の働き方改革の推進	・ 職員がキャリアステージやワークライフバランスを考え、長期、中期、短期の自己目標を設定し、勤務時間を意識した業務遂行が実現できているか。	・ 週1日以上上の部活動休養日、第1水曜日のノ一部活動デー、第3日曜日の県下一斉部活動休養日、定時退勤日の6時台閉庁、夏季休業中の閉庁日を完全実施する。	・ 週1日以上上の部活動休養日、第1水曜日のノ一部活動デー、第3日曜日の県下一斉部活動休養日、定時退勤日の6時台閉庁、夏季休業中の閉庁日を完全実施し、啓発を呼びかけることで、職員の意識改革と働き方改革を図る。	教務	教頭 主幹
学校運営	○ 教職員の資質向上	ベテラン教師、ミドルリーダー、若手教師がそれぞれの役割を自覚して、教育活動に取り組んでいるか。	・ 全職員が、各ライフステージに応じて「育てる」意識や「学ぶ」意識もちながら、ペアやチームとして教育活動をしている割合を80%以上にする。	・ 校務分掌や学年行事、学校行事をベテラン、ミドルリーダー、若手教師の組み合わせを行い、信じて任せることで、意欲を高め、ベテランや中堅の技を伝承するとともに、若手教師の育成を図る。	教務	教頭 主幹
⑤ 生徒を取り巻く「環境」を整える						
領域	評価項目	評価の観点 (具体的評価項目)	具体的目標	具体的方策	担当分掌 (部)	担当者
学校運営	○ 危機管理体制の確立	安全・安心な生活環境を確保できているか。 危険や危機を未然に防ぐことができているか。	・ 安全で安心して過ごせる学校だと実感できている生徒を75%以上にする。 ・ 教職員の危機管理に対する意識の高揚と対応能力の向上を図る。	・ 避難訓練や安全点検を実施し、生徒や教職員の安全の確保、交通事故・生活事故防止に対する意識を高める。 ・ 危機管理対応の職員研修を年1回以上実施し、危機の未然防止に努める。	安全指導 生徒指導	深井 原
	○ 情報発信	保護者に学校の教育活動を理解してもらえたか。	・ 学校だよりは毎月発行、学校HPや携帯サイト(マチコミメール)では毎月2回以上情報発信を行い、家庭・地域・諸機関との連携を密にする。	・ 校長の教育方針や小中連携の取組、いじめ防止や学力向上の取組など学校の特色ある取組を、学校だよりだけでなく、HPや携帯サイト等も活用し情報発信を図る。	HP 教務	三原 教頭
教育活動	○ 特別支援教育の充実	特別支援教育担当者が生活補助員や養護教諭とも連携し、チームとして連携し、組織的に取り込む体制ができているか。	・ 特別支援教育コーディネーターと養護教諭を中心として特別支援教育部会を月1回以上開催し、困り感のある生徒の共通理解に努め、個々の生徒のアセスメントを行い、支援の充実を図る。	・ 短期、中期、長期の目標を設定した、「支援計画・指導計画」を作成し、保護者にも面談の機会を設定しながら計画的に指導に取り組む。 ・ 必要に応じて関係職員や関係機関と連携し、協働して育てる意識をもつ。	特別支援	原田
	○ 不登校対策の推進	不登校及び不登校傾向の生徒に対する体制づくりができていたか。	・ 教育相談主任、副主任を中心に「つなぐ」「働きかける」をキーワードに、「学校復帰プラン」を策定し、全職員が共通理解したうえで、不登校の生徒や家庭に働きかけることにより、不登校生徒の縮減を図る。 ・ 新たな不登校生徒を出さないための未然防止に努める。	・ 「電話作戦」や「担任+1の家庭訪問」、保護者同伴の「別室登校」など、保護者と話をする機会を積極的に作り、保護者の意向を聞きながら、チームで対応していく。 ・ 進路学習にも取り組み、将来に向けての見通しをもたせるように努める。 ・ 学校適応指導教室や関係機関との連携を図る。	教育相談	黒田
本年度の重点目標に含まれない共通評価項目(あれば記入)						
領域	評価項目	評価の観点 (具体的評価項目)	具体的目標	具体的方策	担当分掌 (部)	担当者
学校運営	○ 小中一貫教育の推進	教科「日本語」の取組を核として、小中9年間を見通した学びと育ちの系統性が図られたか。	・ 生活規律と学力向上、教科「日本語」の系統性をもった指導を行うため、小中合同推進委員会を年3回開催し推進する。 ・ 教科「日本語」の授業公開を参観日に位置づけ、小中一貫教育研究会では各学年で教科「日本語」の公開授業を行う。	・ 生徒指導担当、研究主任、教科「日本語」コーディネーターと小中一貫教育コーディネーターとの連携を密に行う。 ・ 小学校との交流の推進等を通して、小学校から中学校へのスムーズなつながりを図る。 ・ 授業研究会等を通して、成果と課題を明らかにし指導の改善にあたる。	小中一貫 教育	主幹

●は共通評価項目のうち必須項目、◎は共通評価項目のうち特定課題、○は独自評価項目